

命懸けて戦場取材をする意味と意義

多くの日本人は海外で起きているジェノサイドなどに関心はなく、国際報道を必要としていない。僕たちは世界のことを知るべきだと思う。

そして、それを伝える人は必要だと思うが、知りたくない人に「知ってください」とお願いしてまで伝える必要性があるのかと自問自答する。

戦争では人の命が奪われる。

日本人ジャーナリストが戦争の現場に立たなくなってから、世界で起きている戦争のニュースは日本人にとって実感のない物となりつつある。

そう、遠くの国で起きた、我々とは関係ない出来事として。

戦争の負の遺産として残される難民問題も、多くの日本人にとっては、よその国のこと。

10年以上、追いつけてきたヨルダンのシリア難民、パレスチナ難民の取材、そして2年間虐殺行為が行われ続けているガザを取材するためにヨルダンへ向かった。

僕の現地での日記。

最初は長い文章で、忙しくなると箇条書きになる。

イスラエルに行くことに迷いがあった。

ガザで戦争が始まってから僅か2年の間に246人のジャーナリストが殺されている。

そして、近々にアルジャジーラのジャーナリストと地元ガザのジャーナリストが2人殺された。

ジャーナリストと医療従事者がターゲットではない時代は遙か昔の話。

現在では真実を伝えてしまうジャーナリストは最重要ターゲットになっている。

食料の配給を受け取りに来た丸腰のパレスチナ人に7.62ミリ弾を打ち込むイスラエル兵士。

そんな場所に行くのは勇気云々ではなく無謀と思える。

それでも行かなければならない気持ちもある。

そんな気持ちで現地で書いた日記。

聖地エルサレムのホテルを予約した。

自分の意思で戦地への一步を踏み出す。

連日、現地の友人と連絡を取り合っていて、戦闘が激化しているとの情報が入ってくる。

予定していたコースが通れない可能性も多々あるらしい。

久しぶりに自分で13階段の一步目を踏み出す、

なんともイヤな気分。

これだけ恐怖を味わって取材が成功したとしても収入は僅か、それどころか赤字になる。

僕は今更有名になりだと思わないし、賞賛されたいとも思わない。

残りの人生、普通に家庭を持って平凡に幸せに生きてゆきたい。

日本人ジャーナリストが現地に行く意義と意味

累積した赤字もそろそろ限界に達している。

今回のガザ取材と次のシリア取材、そして僕の故郷でもあるアフガニスタン取材で引退を覚悟している。
(完全引退ではないが、継続的な取材が続けられない)

アフガニスタンやシリアで死ぬのは本望な部分があるが、イスラエルで死ぬのはちょっと嬉しくない。

そんな気持ちもあって、イスラエルへの渡航が躊躇われた。

それでも行く気でいたのだけど、ホテルを予約して、友人とランデブーの打ち合わせをした瞬間。あ～結局行くんだな～と、なんとも嫌な気分になり、その夜は眠れなかった。

多くの友人たちの協力と戦場ででの運に恵まれ、おそらく日本人で初めてイランがイスラエルに撃ったミサイルの撮影に成功して、NHKのクローズアップ現代が僕の映像を放送してくれた。

ガザ取材は現地にたどり着くことが難しいと思われていたが、イランの空爆によって、通常ならある検問所がなく、イランからのミサイルが飛んでくる警報音の中でガザの空爆の撮影にも成功した。

僕はガザがどんな状態になっているか知っている。

それでも現場に立って破壊し尽くされたガザを目の当たりにした時、怒りと悲しみで涙を抑えることができなかった。

日本のテレビは海外から輸入した映像を使って、戦場に行ったことがないスタッフがニュースを作り、戦場に行ったことがないコメンテーターがコメントしている。

そんなニュースで視聴者に戦争の悲惨さを伝えられるわけがないと思う。

せめて、同じ日本人が現場に立ち、その映像が使われたら、少しは伝わるのかと思う。

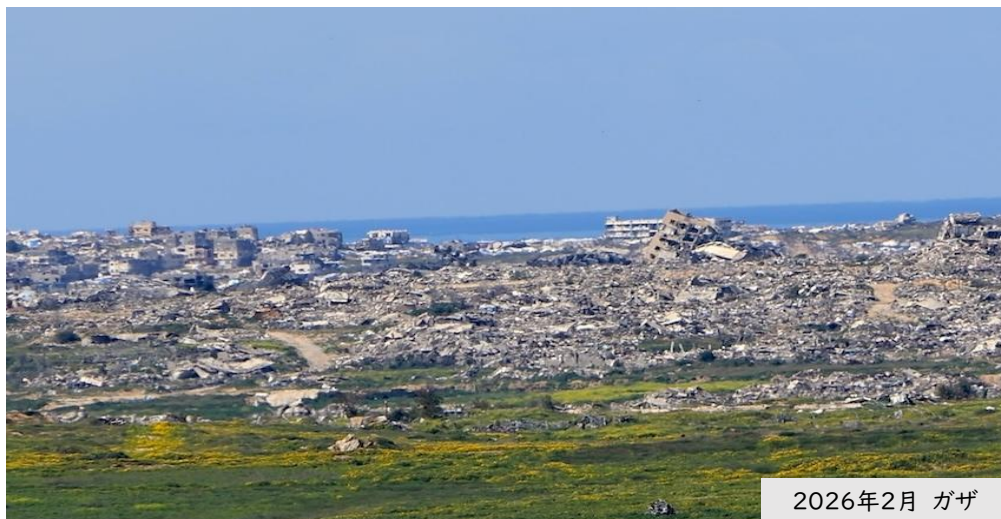
だから、僕は命懸けでガザに向かったのだが。

イスラエル批判になるガザのニュースに日本のテレビ局はびっくりするくらい消極的。

今回の取材は100点どころか120点つけても良いくらいの大成功。

それでも大赤字、そして大手メディアでは使ってもらうのが難しい。

命懸けで取材に向かう「意義」はある「意味」はあるのかと思う。



久保田弘信

The
Real
Report

発行元
問い合わせ先
発行責任者

合同会社G&G Marketing TRRサポートチーム
support@giveandgiven-marketing.com
坂田 兼一